

紫のゆかりのゆくえ

辻 憲男（文学部教授）

「雀の子を犬きが逃がしつる。伏籠（ふせご）のうちにこめたりつるものを」と口惜しそう。十歳ばかりの、白い衣に山吹の上着、扇を広げたような髪ゆらゆらと、泣きこすった赤い顔。のちの美しい成長が今から思われるような少女である。尼君がなぐさめた。髪を撫でながら、「櫛を入れるのもいやがるけれど、見事な髪だこと。でもまだ子供っぽくて心配なのですよ。亡きお母さまは十ぐらいで、とてもしっかりしておられたのにね」などと言う。尼の泣き顔を見て、少女もさすがに伏し目にうつむくと、髪つやつやとその顔にこぼれかかる。

夕顔の事件から一転、永遠の女性・若紫（紫の上）の登場である。春霞の北山の寺、上の光景をまたも源氏は小柴垣から透き見していた。「犬き」は仕える童女の名。祖母の尼のいつくしむ少女は、藤壺女御の姪にあたる。その人への秘めた思慕ゆえに、源氏はゆかりの若紫を引き取る決心をする。

某寺は岩倉の大雲寺。井原西鶴の『好色一代女』の最後の舞台でもある。主人公はここにあった五百羅漢を見てさめざめと泣く。「これほど多き中なれば、必ず思ひ当たる人の顔あるものぞ」。この草子、始めは嵯峨野の「好色庵」に住む老女から話を聞くという設定である。源氏をなぞった一代男は楽天家だったが、一代女の懺悔には人生の深い哀感がこもる。

源氏物語を現代につなぐ、中村真一郎の小説『雲のゆき来』。あだし野の念仏寺に来て、彼女は「私たちは今、影ですね」とつぶやいた。無数の石仏の行列の間を漂った。不思議な旅の出会いが、二人を現世からこの来世へと導いてきたのだという「錯覚」が、その時、私の胸に浮かんだ。



大雲寺の旧地。隣接して石座神社、実相院、岩倉具視旧宅などがある。京都市左京区。